



# サヨナラアシタ



taco

「サヨナラアシタ」



ひらり、ひとひら 舞い落ちる惑う花 ふわり、ふうわり ほのかに惑う香

今日の君は僕が好きでした

アリガトウ

今日も君に「好き」と伝えることが出来ました

明日の君は僕を好きですか？

明日も君に「好き」と伝えて良いですか？

ひらり、ひとひら 舞い落ちる惑う花 ふわり、ふうわり ほのかに惑う香

明日の君は今日よりきっと 美しいだろう

君が誰かのものになってしまうのならば

その時はいっそ僕をこの世から消してください

感う花、感う香 サヨナラアシタ.....

## 「キモイ」

僕の詞を呼んで、森子はそう言い捨て、手に持った紙を破り捨てた。

「この世から消してくださいって……ここまで思われる【彼女】が不憫だわ」

森子は、苦虫をかみつぶしたような顔で吐き捨てるように呟くと、破り捨てた紙を丹念に踏みつぶして、踵を返す。僕は返す言葉もなく、踏みつぶされて茶色く変色したその紙片を必死でかき集めた。

「真鍋の書く詞って、マジキモイ。誰のことと思ってんのか知らないけど、現実にいる女の子にそんな感情向けてあげるの、やめなね」

まるでゴミでも見るかのような視線を僕に投げかけ、小さく舌打ちをすると、ふんわりとウェーブのかかった柔らかい茶色い髪の毛をさらりとかき上げ、森子はそのまま、階段を降りて屋上から出て行ってしまった。

「……あ、も、森永さん……まって……」

森子。

なんて、心の中であだ名で呼んでいるけど……高校に入学してこの二年間、僕は森永愛さんをクラスの女の子達が呼ぶように、「森子」なんて呼べたことは、まだ一度もない。

.....僕は、入学式の日。十五歳の彼女に恋をした。



入学式で、新入生代表で登壇した彼女は.....誰が見ても、息をのむほどに美しかった。

ふんわりとウェーブのかかった、柔らかで艶やかな髪の毛。くるんと上に向いた、ふさふさの睫毛を讃えた大きくて丸い目。小さな鼻にぷくっと丸い頬、軽くピンクのグロスを塗って、ぷるんと輝く唇。掌に乗りそうなほどに小柄で、華奢な女の子。たくさんの新入生や在校生に見つめられ、緊張しているのか、顔色は陶器のように透き通るほど白く、無表情で、それはまるでアンティークのフランス人形のような美しさだった。

クラスの男達は、壇上の彼女の美しさを口々に褒め称える。僕も.....そんな一人だった。

僕の名前は「眞鍋節也」

彼女の名前は「森永愛」

「も」と「ま」で、偶然、席が隣同士になった。

「.....眞鍋ってさ.....作文コンクールとか、よく出してるよね」

彼女に見とれたまま、何を話して良いのか分からない僕に、彼女の方から声をかけてくれた。

「.....出してるというか、先生が勝手に.....」

「.....あたしもそうなんだけど、あんたがいるから金賞取れたことないの」

「え、あ、そうだったんだ。ごめんなさい」

僕が思わず言った「ごめんなさい」が気に障ったようで、彼女は呆れたように顔をしかめる。

「なんで謝るの。あんたの詩、好きよ。会って見たかったのよね、眞鍋節也。これから、よろしくね」

そう言って、彼女は僕に手を差し出した。慌てて、僕はその小さな手を両手で握り返す。彼女がにこりと微笑んでくれた。

.....ただ、それだけ。それだけで、彼女は僕の心をわしづかみにしてしまった。

以来二年間、僕は詩を作り続けては彼女に見せているんだけど、その詩たちは残念ながら彼女の心を掴むことは出来ていない。それどころか、駄作過ぎて呆れられ、ここ半年は駄作を破られては踏みにじられる日が続いていた。

「あんな怖い女のなにが良いんだか」

高校に入ってから親友になった、ハクト（本名・鈴木博人＝ヒロト≠ハクト）が、そんな僕を呆れたように笑う。

「森永なんて、顔が綺麗なだけで、性格最悪じゃん」

ハクトは顔が綺麗で社交的だから、女の子に良くモテる。森子ほど綺麗な女の子に出会った事はないけど、顔もそこそこ、性格も良くてスタイル最高の女の子とだったら何人も付き合ってるし、紹介もしてあげるのにと、僕を嗤った。

「それでも……俺は森子が好きだから」

僕が微笑むと、ハクトは呆れたように目を細め、「バンドでもやろうか。モテるかもよ」と呟いた。

「バンド？」

「ギター。今、練習してるんだ。モテるかと思って」

「お前がそれ以上モテてどうすんだよ」

僕はハクトの短絡さに呆れたけど、四歳の頃からピアノを習っていて、曲を作ることはそれほど苦じゃなかったし、詩を書くことも嫌いじゃない。面白そうなので、ハクトの誘いに乗ることにした。

……バンドの名前は、「B l a u e r H i m m e l」

ドイツ語で「青空」という単語だ。良いネタが思い浮かばなかったので、ハクトが大好きなブルーハーツの曲からパクった。パクるだけではなんなので、当時僕が独学で習っていたドイツ語で名前を付けた。それだけだ。

半年くらいして、いろんなライブハウスでお世話になることになってから、その名前にしたこと激しく後悔した。名前が長い。文字数が多すぎて、ドイツ語を習得していない僕以外のメンバーが、いつまで経っても自分のバンド名をちゃんとかけないことに気がついた。

「バンドの名前がちゃんと書ける」

ただそれだけのことで、僕はバンドのリーダーになった。

バンドのメンバーは、まずはギターのハクト。y o u t u b eやニコ動で「やってみた」なんかをUPするほどにテクニックはあるが、実はまったくタブ譜が読めない。今まで覚えた曲はすべて耳コピらしく、こいつにギターパートを覚えさせるために、僕は自分の曲を作る際、まずはパソコンでデモを作るところからはじめることになった。

ドラムのシンゴにベースのユウヤ。ユウヤの実家が八百屋で、二十時には店じまいをする。その店が終わってからおじさんが寝てしまう二十二時までのを、バンドの練習場として貸してもらえる事になっている。

困ったのは、ドラムのシンゴだ。彼は偏差値が七十もある進学校のお坊ちゃまだった。ひとつのことにしか集中できない彼はバンドの練習に一生懸命になりすぎ、ちょいちょいテストの点数を落としてしまう。そうするとママに怒られて、ライブのある日に家から出ることを禁止される

ことがあった。

.....そんなとき、僕たちのヘルプを買って出てくれる人がいた.....。

シドさんという、二つ年上のドラムス。去年高校を卒業したばかりで、今は「J a c k i n t h e b o x」というバンドに所属し、プロを目指してヒモ生活だと自分を嗤っている。日本人の血の方が多いというのが信じられないほどに見た目が欧米人のクォーターで、ガタイも良くて、ドラムの演奏も僕の譜面は初見のはずなのに、シンゴより上手に叩く。

「出演料は、お前らが稼げるようになってからで良いから」

そう言って、シドさんはいつもヘルプのお礼金も受け取らず、缶コーヒー一本だけ奢らせてくれた。



バンドを結成して半年経って、八ヶ月経って……僕たちは三年生になった。

入学当初百六十二センチだった身長が急激に伸び始め……三年生に入る頃には百七十五センチを優に超えていた僕は、その頃から急激にモテるようになった。

……だけど、彼女はまだ振り向いてはくれなかった。

だけど、だけど少しずつ。彼女は僕の詞を、曲を、認めてくれるようになった。

「……Blauer Himmelの、一番のファンは私だね」

ある日……森子が、そう言って微笑んでくれた。

「……ふぁ、ファン？」

僕の問いに、彼女が頷く。

「好きだよ、眞鍋の詞」

「あ……でも……それは森永さんが、ずっと読んでくれたから……」

「この、くそキモいところが良いよね」

そんな僕の言葉にかぶせ、森子がキッパリという。

「そんな風に思われる彼女も幸せなんじゃないかって……二年経って、やっと思えるようになったよ。だけど、リアルな彼女が出来たら、殺してくれなんて言うんじゃないわよ？ 彼女がこまっちゃうから」

そう言って、森子がにこっと微笑む。

「……じゃ……じゃあ、森永さんが、俺のリアルな彼女になれば良いじゃん。殺してくれなんて言わないから。あ、でも、浮気したら殺しても良いから」

口が滑った。

「……私が？ 眞鍋の彼女に？」

SMの趣味でもあるのかと、言葉攻めが好きなマゾかと、彼女は真剣に僕に問いかける。

「……多分、そっちの趣味はないと思うんだけど、だけど、君の言葉攻めには二年間耐えた。だからおそらく俺は潜在的なマゾだと思う」

もう、自分が何を言っているのか分からない。

「これからも君の言葉攻めを受けたいと思うんだけど、君はサドになる自信はあるか？」

「サドもなにも、これが私の素だから」

フランス人形のように表情を変えない、美しい彼女は、三十センチ以上背が高くなってしまった僕を見上げた。

「……二年前なら良かったんだけどねえ。そんなにデカくなっちゃったんじゃあ、k i s sもしづらいから。ヤダ」

彼女が、キッパリと僕を否定する。

「しゃ、しゃがめば良いじゃないか。たまに肩車して、視点2.5mの世界を楽しませてあげ

るし」

身長百四十五センチあるかどうか分からない彼女に向かって、僕は必死で説得を試みた。

.....だけど。その日の彼女の回答は「NO」だった。

無理もない。二年半も、「友達」だった男からの突然の告白だ。まずは恋愛対象に見るところから始めて貰わなくてはならないのに、僕は何かを焦りすぎた。

まず、僕は、高くなりすぎた身長を、小柄な彼女のために有効に使うことを思いついた。

脚立がなければ取れないモノをすべてとってあげる。「図書館や本屋で男の子に本を取ってもらおうとドキッとさせる」効果を狙ったんだけど、これは今までもずっとやってあげていたのでそれほど効果はなかった。

次に、「かわいすぎる彼女を暴漢（彼女を狙う地元ヤンキー）から守る」をやってみたけど、僕より合気道初段の彼女の方がはるかに強かった。地元のヤンキーは一年の頃にあらかたゞ終わって、今では「姐さん」と呼ばれているそうだ。

勉強は一応、大学進学を目指していた僕の方がはるかに出来た。だけど、そもそも高校卒業後の進路をすでに美容専門学校に決定している彼女には、これ以上勉強を教えても何の意味もなかった。

玉砕し続ける僕を見て、ハクトやシドさん、メンバーは思いっきり嗤ってくれる。彼らにとっては他人事なんだろうけど、もう三年生の夏休み。彼女と毎日会えるのも、あと半年しかない。

「女なんて、黙ってても寄ってくるだろうに」

ハクトとシドさんがそう言って首をかしげるけど、天然物の美形の二人と、平均的な日本人顔の僕とでは足をくっつけている土俵が違う。そして、森子はどちらかと言えばこの二人が立っている土俵にいる。僕は、そこまで這い上がらなければならない。その辺の努力に早く気付いて欲しいものだ。

「……まあ……今のお前の彼女だったら……俺もイヤだな」

シドさんが僕を見て、呆れたように目を細める。

「なんでイヤなんです？」

髪の毛も、染めた。黒から、校則に触れない程度の茶色に。眉も整えて、歯医者に月一で通い、口臭にも気をつけている。制服のブレザーだって、体操服のジャージだって、お母さんに頼まないで毎週末、自分で洗うようになった。

「……私服のセンスがださい」

ハクトが僕が着ている紺色のジャージを指さし、キッパリと言い放つ。

「なんで私服が中学の時のジャージなんだ」

「失礼な。小学校の時の体操服だってまだちゃんと使ってる」

「せめてゼッケンくらいとれ。そして、その恰好で渋谷に来るな。地元でコーヒー飲んでユニクロのマネキン眺めてファッションセンスの勉強してろ」

ハクトの言葉に、シドさんがぽかんと僕のジャージを眺める。

「それ、練習着じゃなくて私服なのか？」

「そうですけど……？」

「それで渋谷に行くの？」

「原宿にも、表参道にも、お台場にもこれでいきます」

「3-1 眞鍋で？」

「何か問題でも？」

「鞆はランドセルじゃないだろうな」

「両手があいて楽ですよ？」

.....その日から、何故かシドさんが僕に「俺も成長しすぎて着られなくなったんだ」と、たくさんの服やアクセサリをプレゼントしてくれるようになった。そして、この服はこのアクセサリとあわせて.....など、強要してくるようになった。気持ちはありがたいけど少々、ウザい。

シドさんからもらった先が鉄入りの革のブーツは、非常に重かった。ヴィンテージ物だというジーンズは、身長はほぼおなじでも外来種のシドさんだからこそ似合う足の長さで、切ろうかと思ったけど、「一本十万円！」と、ハクトに止められた。もらったTシャツは黒ばかりで、陽射しの強い夏には暑い。白く輝く半袖の体操服が恋しい。

だけど.....どうもそのあたりから、僕は急激にモテるようになった。

地元のフリーペーパーやら、タウン誌の取材が良く来るようになって、「Blauer Himmelボーカル、雪夜《SETSUYA》くん（18）」なんて紹介されると、次の日からは下駄箱にも、あんまり知ってる人がいないはずのメールアドレスにも、じゃんじゃん告白のメッセージが送られて来るようになった。

.....そして僕は.....少しずつ、天狗になっていた。

「なに、雪夜《SETSUYA》って。だっさ」

森子が、僕が載っているフリーペーパーを見て、眉をひそめる。

「.....そう」

いつもの僕なら、森子に「ださい」と言われたのが恥ずかしくて、その紙を取り上げて、くしゃくしゃに丸めてしまったかもしれない。だけど、その日の僕は、そうして僕を否定する森子が、ひどく嫌な女に見えた。

「あんたは、緑のジャージにぼさぼさ頭の方が似合ってるわよ」

僕の背中に向かって、森子が呟く。

「だけど、うちの母もファンの子も、今の方が良いって言ってくれてるから」

僕は森子にそれだけ言って、踵を返す。

「俺は俺のやりたいようにやるよ。例え森子が認めてくれなくても」

.....森子と出会って初めて、僕は森子を【森永さん】でなく、あだ名で呼んだ。だけど、森子自身はそれに気付いていないようで、自分に背を向けた僕のシャツをぐっと掴む。

「.....なに？」

「ださいあんたの方が好きだって言ってんのよ」

——一瞬。

僕は、森子に何を言われたのか分からなくて、校舎の屋上から、ゆっくりと空を見上げた。そして、それからさらにゆっくりと、森子を振り返る。

「……もう一度」

「中学ジャージで、ぼっさぼさ頭の、“真鍋セツヤ”の方が……”雪夜”より、好き」

「抱きしめても怒らない？」

森子が頷くので僕は彼女を抱きしめたものの、彼女が小さすぎて頭しか抱きしめられなかったので、そのまま脇に両手を挟んで、高々と持ち上げてしまった。

「失礼ね！」

僕に高い高いをされた恰好の彼女が、真っ赤な顔で怒る。

「ごめん……気が動転して。まさか、高校在学中に君に振り向いて貰えるとは思ってなかった」

僕は身体が弱い。筋肉もほとんどない。そんな虚弱な僕がこんなに高々と差し上げているのに、彼女はまったく重さを感じない。太陽を背にした彼女は、本当に良く出来たフランス人形のように見えた。

僕は彼女を近くに寄せ、ギュッと抱きしめる。彼女も僕の首に腕を回し……。二人で何度も、「好き」と言い合った。

そんな僕の話聞いて、ハクトとシドさんが「青春だぁ」と大きく笑う。

「ない、俺たち、ない、そんな甘酸っぱい青春の1ページがない！」

自分の初体験は中学の頃、酒に酔って神社の境内で寝ていたところを帰省中の大学生のお姉さんに襲われたんだとシドさんが言い、ハクトはハクトで、高校に入ってからずっと僕と一緒にいるはずなのに、いつの間にか今の彼女は3人目だという。

「だから、甘酸っぱい詞が書けないから、セツヤに頼るしかないんだ」

二人はそう言って笑った。

実際、それからの僕の詞は、甘酸っぱい恋の歌が多くなった。ラブソングだと言えれば聞こえは良いけど、この頃の歌は今の自分が見て、とても恥ずかしい。よくもこんなものをライブハウスで恥ずかしげもなく歌っていたものだと思う。

事実……メンバーにも、彼女となった森子にも、非常にウケが悪かった。

「あんたって……負け犬がお似合いなんだわ」

森子の辛辣な言葉が飛ぶ。だけど、メンバーは誰一人止めてくれず、森子の言葉に大きく頷いた。

私生活で森子と二人、ラブラブで幸せなのに、書く詞は負け犬……。愛を求め、愛にさまよい、人生に惑う。そんな男の詞。どんどん、詞と心が離れていく気がした。

そして……森子と初めて結ばれた日から……僕はまったく、詞が書けなくなった。

「バンドを辞めたい」

僕は、メンバーに向かって頭を下げた。

元々、森子以外の女の子に目を向けて、モテたくて、始めたバンドだ。森子がいる今、こんなに思い悩んでまで続ける必要はない。そう思ったからだ。

「無理に新譜を出さなくても、今まである曲でいいじゃないか。せめて卒業までやろうぜ」  
ユウヤがそう言うので、卒業ライブに新曲を一曲出して、バンドを解散することで合意した。

「Blauer Himmelは高校卒業をもちまして、解散します」

そう告げたのは、夏が過ぎて新学期になってすぐのライブハウス。

ハクトとシンゴは同じ私立大学に進学すると言っているし、ユウヤは実家を手伝いながら、ベースの勉強を続けると言っている。僕の家は母一人だし、僕はハクトやシンゴほど頭がよくないから同じ大学には行けないだろうけど、公立の大学はいくつか受けるつもりでいた。だから、今のタイミングでファンのみんなに解散を告げることはいいことだと……そう思っていた。

「Blauer Himmelが解散するのは貴方のせいよ！！」

「そうよ、セツヤくんたぶらかして！」

「ちょっと可愛いからって、良い気になってんじゃないわよ、このチビ！」

ライブが終わって、片付けを終えてライブハウスを出た直後。女の子の高い声の怒号が、暗い路地に響く。突き飛ばされた森子を、僕は抱き留めた。

「キミたち、なにしてんの。この子、俺の彼女なんだけど？」

森子に何か叫んでいた女の子が、僕を見て「きゃあ」と高く叫んで、顔を両手で隠す。

「……彼女が、なんか悪いことした？ あ、口が悪いから、気に障ったらごめんね？」

森子を抱きしめながら僕が言うと、女の子達が「違います、違います」と、大きく首を振る。だけど、森子の頬は腫れてるし、唇は少し切れて、腫れて血がにじんでいる。

「……これ……キミたちがやったの？」

僕が女の子達を睨み付けると、女の子達は「違います、違います」と、更に大きく首を振った。

「あんたたちが解散するの……私の所為らしいわ」

森子がそう小さく呟いて、僕を突き飛ばすようにはねのけ、大きく溜息を吐いた。

「冗談じゃないわよ。好きだ好きだって言うから付き合ってたのに、ファンの子達からは恨まれるし、私の所為で良い作品が作れなくなって、解散しますって……ふざけんな」

「森子……？」

僕が小さな森子の顔を覗き込むと、森子がキッと僕を睨み上げた。

「解散よ、解散！」

「……？ うん、だからBlauer Himmelは解散……」

「違う、私と、あんたが、解散！ コンビ解消！」

森子の言葉に、僕だけでなく、森子をいじめていた女の子達も、驚く。森子が、女の子達を睨み付け、僕を指さした。

「これ、あんた達にあげる！ 私の大事な人なんだから、あんた達ファンが責任持って、大事に育ててよね！」

森子の迫力に、女の子達が思わず「はい！」と頷く。次に森子は、キッと僕を睨み上げた。

**「あんたは一生負け犬でいろ！ それがお似合いだ、バカ！」**

……森子の捨て台詞に……くるりと踵を返して走り去る、小さな背中に……僕は何も言えなくて……ファンの女の子達とともに……古くて狭い路地に取り残された。



そんな僕の失態をいつもメンバーと一緒に笑ってくれるはずのシドさんが.....同じ日から、ライブハウスに来なくなった。

シドさんが所属する Jack in the box のメンバーさん達によると、彼女と一緒に住んではずのアパートには、すでに他の人が住んでいたそうで.....黙って失踪したのではないかと言う話だった。

僕たちはシドさんにサポートしてもらっていただけだったけど、Jack in the box はたちどころに困った。シドさんほどの技量を持ったサポートメンバーがすぐに見つからなかったからだ。今までの恩返しにとシンゴがサポートを買って出たけど、Jack in the box はインディーズとは言え、大きなハコでもワンマンでいっぱい出来るほどの有名バンド。たかだか高校三年生が、一日二日練習したくらいで叩きこなせるものではないらしく、「気持ちだけはもらっておく」と丁寧に断られた。

週に二回の小さなライブハウスでのライブは、なんとか別のサポートに入ってもらってこなしていたけど、月に一度の大きなハコでのライブは待ってはくれない。ファンのほとんどがボーカルさんと、ルックスの良いシドさんの人気で支えられていたバンドだったから、シドさんがいなくなったと周りに知られてからたった二週間で、Jack in the box の人気は目に見えて下がり始めていた。

最初は悠長にシドさんの帰りを待っていたメンバーさんたちにも、大きなライブを十日後に控えた頃から、焦りの色が見え始めた。

.....だけど.....結局.....ライブの日になっても、シドさんは帰ってこなかった。

大きなライブを、主力メンバーがいまままでこなした Jack in the box 。そのライブは、それでも僕たちなんかよりずっとずっと素晴らしいものだったけど。だけど、ファンにも、メンバーさん達にも、それは最悪のライブだったらしい。

「シドさんの帰りを待つか、解散か」

最悪のライブを終えたメンバーさん達が、喧々諤々話し合う中。

——大雨が降る、二月の夜。僕は、路上で倒れるシドさんを見つけた。

「なんで、こんなところに寝てるんです」

思わず、僕は路上でうつぶせに倒れ込む、ボロボロの服を着込んだ巨人に声をかけた。

「……返事がない。ただの屍のようだ」

冷たい雨が降る、ダウンコートを着ていてもギョッと身を縮めないと寒くて仕方がないこんな夜。コンクリートに寝そべったままのシドさんが、ポツリと呟く。

「……」

僕は思わずくるりと踵を返した。そんな僕のジャージの裾を、シドさんが掴む。

「屍がジャージの裾をつままないでください」

「腐った死体だ」

「マドハンドですか。何があったか聞いてあげますから、起き上がって下さい」

僕の言葉に、シドさんが顔を上げる。

その顔に、僕は少し、ほっとした。ガリガリに痩せて、頬がこけて、目もくぼんでるけど……世の中を悲観したとか、そういうような顔ではなかった。

僕はシドさんを近くのビジネスホテルに連れて行った。とりあえず、何よりもまずシャワーをあびてもらう。耐えられないほどに臭かったからだ。これじゃあ、ファストフード店にすら入れられない。

シドさんはまるまる一ヶ月間姿を消していたけど、お風呂に入ったのは今が初めてだという。脱いだぱんつも臭いし、着ていたコートも二月に着るような分厚いものではない。もともと体毛の薄い人なのに、一度も髭を剃ってないのか、無精髭を乗り越して顔の半分が柔らかい髭で覆われている。

「何があったんです」

ビジネスホテルに併設されていたコンビニで、ぱんつとシャツだけは売ってたから、それを買って、お風呂上がりのシドさんに着てもらった。

「一緒に暮らしてた女に捨てられた。家に帰ったら、アパートが引き払われてた」

「……ライブハウスに住めば良かったじゃないですか。どうせそこで働いてるんだから」

僕が言うと、シドさんがじっと僕を見つめる。

「その発想はなかった……」

「その発想を持ちましょう」

女に捨てられたと軽々しく言ったシドさんだったけど、その理由については口を濁したいようだった。ただ……。その女性がシドさんにとって、とても大事な人だったことだけは……僕にも分かった。

僕に向かって元気そうに笑うシドさんは……僕が差し出したサンドイッチに、一度も口をつけなかった。この三週間、きつとずっと、そうしてきたのだろう。Jack in the boxのメンバーさん達に謝っている最中も、そして、メンバーさん達にごってりたっぷり叱られて……Jack in the boxの解散を告げられている最中も……僕が差し出した、大好きな銘柄の缶コーヒーにすら、ただの一度も口をつけなかった。

「シドさん。食べてください」

メンバーさん達が帰ってから、僕はシドさんにサンドイッチを差し出す。シドさんを拾ってから二日。まだ、ただの一度も食事をしているところを見ていない。それどころか、水すら飲んでいるのか、怪しかった。

「いらん」

サンドイッチを差し出す僕に、シドさんがそのサンドイッチを押し返し、首を振る。そして、匂いを嗅ぐのも嫌そうに、トイレに駆け込んだ。

「.....つわりですか？」

「うん、いま、三ヶ月で.....」

そんなボケだけは返せるらしい。僕は大きめに溜息を吐いて、シドさんに缶コーヒーを差し出す。

「せめて、水かコーヒーだけでも飲んで下さい」

それでも、シドさんはにこりと微笑んで、それを僕に押し戻した。

「.....食べないと死にますよ？」

「よかったい」

.....甘い。ケーキか、マシュマロか.....。なんだか、そんな、お菓子を連想させるような... ..甘ったるい声。いままでどこか、頑張っって声色を低めにして喋ってるような気はしていたけど、シドさんの地声ってこんな甘ったるい、高い声だったんだ。

「.....セツヤの彼女.....森子ちゃんやっけ？ 元気か？」

「別れました。ふられました。もう要らないって」

僕が応えると、シドさんが力なく笑った。.....違う。いつも通り大きな声で笑っているつもりで、力が出ないんだろう。

「いかんやね」

ポツリと呟き、シドさんはベッドに倒れ込むように寝そべった。

「たった一人のおなごし大事にできんで、ファンば大事にできんしゃあわけんなか」

「.....訛りキツイっすね」

「やけん、これのほんなこつん俺やけん」

ベッドに仰向けになり、照明がまぶしそうに手をかざして、シドさんは呟く。大きな腕時計を付けた、その手で.....シドさんは、何度も何度も、自分の額を叩いた。

「.....出て行った彼女に何をしたのか、無理矢理聞きます」

「.....枕営業」

シドさんの言葉に、僕は驚いてシドさんを見つめる。

「ずーと、ずーと、リコさんに会うずーとずーと前から.....」 Jack を始める前から、俺は枕営業で客獲ってきとるんよ」

「バレたんですか？」

「客の一人が、俺の彼女になったと思ひ込んで.....リコさんに、直接別れてくれち、言いにいって.....」

彼女が愛想を尽かすのも当たり前だ……。僕は思わず大きく溜息を吐いて、両手で顔を覆った

。

「アホやなあ、俺」

手の甲で顔を覆ったまま。シドさんが、小さく、小さく、呟いた。

「失って、ほんなこつ大事なもんが、ようやくと見えた気がしたんよ」

その言葉から、しばらくの沈黙。そして……シドさんは、掠れた声で、絞り出すように、彼女の名を呼んだ。

「……リコさん……ごめんなあ……」

ごつんごつんと腕時計を額に叩きつける音が響く中……たった一言。僕はもう、それ以上……シドさんに食べ物を勧めるのも、失踪した理由を聞くことも……辞めた。

ドラムのシンゴが、大学受験に落ちた！　と言う話を聞いたのは、その次の日だった。

「なんで他所の学校受けなかったんだよ」

「受けたよ。下痢になってセンターがダメだったんだよ」

本番に弱いシンゴらしい。また、間の悪いことにシンゴほどまじめに受験勉強に取り組んでいなかったハクトが、同じ大学の法学部に一発合格してしまっていた。

それを知ったシンゴのママが切れたらしい……。

「……俺、脱退して、来年の受験に備えます……」

そんな事情で、シンゴがBlauer Himmelを抜けることになった。

「……やっば、あのとき解散しとけばよかったな。バンドなら、大学に入ってからまた新しく作れるんだし」

ユウヤがポツリと呟く。「そうだね」ともなんとも言えなくて、僕とハクトが俯いた。そんなとき……。

「え、解散するんですか？　もったいない。キミたちの曲、僕は好きですよ」

ライブハウスのオーナーの友人だという……“その人”が、声をかけてきた。

「誰だ、おっさん」

ハクトが訝しげに、ばっちりとスーツを着込んだダンディなオッサンを睨み付ける。

「わたし……こういうものです」

オッサンはそのダンディなスーツの胸ポケットから、一枚の名刺を取り出し、ハクトに差し出した。

「……音楽事務所の……社長？」

「ええ、インディーズの、小さな小さなレーベルの、事務所ですが」

オッサンはそう言い、僕の顔を見つめた。

「眞鍋セツヤくんですね。君の詞、確かに、僕の耳と心に受け取りました。君の才能を、僕が買いたい。君自身を、僕に預けてみませんか」

オッサンが、低く、甘く、ダンディな声で、僕に甘い言葉を囁く。

「……だけど、俺たち……ドラムが抜けたので、もう演奏できません」

僕はそう言って、オッサンの誘いを暗に断った。

「ドラムなら……ひとり、良いのを知ってるんですが。使いませんか？　女癖は悪いが、見た目も演奏の技量も最高ですよ」

オッサンがそう言って、ドラムセットの方に目を遣る。

そこには……シドさんが座っていた。

「シドさん！」

僕たちは、思わずシドさんに駆けよる。

「もういいんすか？　なんか食べましたか？　飲みましたか？」

僕の問いかけに、シドさんがうるさそうに顔をしかめ、何度も小さく頷いた。

「昨日、お前が帰ってからこの社長に見つかって、病院にたたき込まれて、点滴打ちまくられた。俺、保険証すらなくて入院費も治療費も払えなくて、社長に借金だ。勝手に治療しといて、入院費、事務所で働いて返せて……」

シドさんはどうやら、社長の事務所でアルバイトのローディとして雇われることになったらしかった。

「うちのアルバイト兼、所属タレントです」

社長が付け加えた。

「キミたちのバンドで、ちゃんとしたメンバーが見つかるまで、このシドをサポートメンバーとして貸し出します。これでどうですか？」

「レンタルメンバーですか？」

僕が訊ねると、社長が「そうです」と大きく頷いた。

「スペック高え」

今日で辞めてしまうシンゴが、「是非に」と、勝手にOKを出してしまう。

「……だが、俺からも条件を出させてもらおうか」

シドさんがそう言って、僕が着ているジャージの胸ぐらをぐっと掴んだ。

「真鍋節也なら止めねえが。Blauer Himmelの雪夜の衣装は、俺にセットアップさせろ。三年一組の緑のジャージに、ランドセル背負った十八歳がリーダーのバンドなんて、お断りだ！」

シドさんのあまりの剣幕に、僕は思わず「はい」と頷くしかなかった。

.....それから.....。二月の末。僕たちは.....高校卒業の日を迎えた。



結局、十月のあの日以来。僕は、森子と一切口を利いていない。同じ学校だから顔は合わせるけど、毎日、無視される日が続いていた。

だけど、僕は、今日こそ言おうと決めていた。もう一度.....付き合ってくださいと。

負け犬の詞は、六十曲分くらい書きためた。森子を失って、どん底になった気持ちを、十月のあの日から、毎日、毎日、書きためた。

同じく彼女を失って、もう恋愛も枕営業もこりごりだと嘆くシドさんが、ノリノリでだめ出ししてくれている。負け犬男二人の負け犬ソング。これに曲をつけていくから、今から森子とラブラブになっても、曲が足りないなんてことはB l a u e r H i m m e lが解散するその日まで、おそくないだろう。

シドさんに見つかったらきっと怒られるだろうけど.....卒業証書を受け取った後、僕は.....もうすっかり丈の合わなくなった、えんじ色の高校ジャージに身を包んだ。三年間、高校生活を見守り続けてくれた、えんじ色の三年一組眞鍋のゼッケンがついた、高校ジャージ。

僕は、これでもう一度、森子に告白するのだ。

森子は、高校生活最後の玉砕覚悟で愛を告白しようと群がる男達に取り囲まれていた。

そんな男達が、ジャージに身を包んだ僕を見て「何しに来たんだ、元彼が」と、睨みを入れてくる。そんな男達をかき分け、僕は、森子の前に立った。

「.....なによ」

森子が、身長百七十八センチになった僕を睨み上げた。

「好きだよ」

口ではそう言いながら、僕も森子をにらみ返す。

「もっかい、付き合ってください」

シドさんに命令されて、昨日代官山で整えてきた、おしゃれな金髪。ファンの子からもらった、可愛らしい人造サファイアの小さなピアス。眉毛だって整えた。顔だけはばっちり決めたそんな僕を包むのは、ださいえんじの高校ジャージ。

それをみて、周りの男達が笑った。

「だっせえ」

「うっさい。だけど、これが俺なんだ。ありのままの、俺だ！」

僕は、周りの男達を一喝する。

「森子、俺と付き合っ。もう、ファンの子と君を哀しませたりしないから。ちゃんと、両立するから」

そう言う僕を、森子は可愛らしいその丸い目で、僕を見上げる。可愛い唇が、ゆっくりと動く

。

「い・や」

.....僕は。玉砕した.....



ゼッケンがついたままのジャージ姿で、僕は校庭にくずおれる。

「……東京ドームでライブするほど人気が出たら……もう一回付き合っただけ」

森子の言葉に、僕は顔を上げる。

「それを見届けなくちゃいけないから……私、ずっとBlauer Himmelのファンでいることに決めてるの」

僕の前に座り込んで、森子がにっこりと笑った。

「三年間、私の追っかけ、お疲れ様。これからは、私があんたの追っかけよ」

「……森子……？」

僕が名前を呼ぶと、森子がにっこりと微笑んだ。

- ・抱きしめるのはダメ。キスも、もちろんエッチもダメ。
- ・ファンの前では（ファンクラブの）「会長」と呼ぶこと。
- ・普通のファンの人々と、同じように扱うこと

……さまざまな制約を付けられたけど……それから二年経った今も、森子は僕の隣にいる。

シドさんは、Blauer Himmelに加入するのあたり、「マリモ」という名前に変えた。

なんでも、失踪した彼女を追いかけて、ヒッチハイクで飛び乗ったトラックが地元方面ではなく反対の北海道行きだったそうで、阿寒湖のマリモを見て、なんだか人生が変わったような気がしたからだそうだ。……もう一度ヒッチハイクで帰って来たために、あの日のライブは間に合わなかったそうだ。

「もしも、そのトラックが地元に着いて……彼女にちゃんと会えてたら……お前、どうしてた？」

僕がそう訊ねると、マリモはにっこりと微笑む。

「彼女と二人で実家ん家業継いで農作業に精ば出しとった。子どもは今頃三人目が腹に入っとうくらいっちゃろう。三十五過ぎたら、母ちゃんの跡ば継いで、村の村長ばやらんといけん」

マリモにしては地に足の着いたまじめな回答に、僕は思わずぶっと吹き出した。

「そっちの方が幸せだったんじゃないの？ こんな、明日の分からない道より」

「嘘」

マリモはじっと遠くを見つめたまま、そう呟いた。

「彼女にはもうすでに優しくてかっこいい旦那さんがいて、お腹にもしっかり赤ちゃんが入ってて、もう俺なんか入っていく隙間もなかった」

そんなマリモの回答に、僕は思わずマリモの顔を見つめた。

「……ちゃんと会ってんじゃん」

……北海道のマリモを見て人生観が変わったって言う話の方が嘘かよ。

「それに……俺はあのとき、リコさんに振られてよかったと思うとるよ。実家で農作業して、村長になっとなら……」

マリモが、静かにそう呟いて、ふっと遠くを見つめる。

マリモの視線の先には……プールの中ではしゃぐ、黒いスタッフTシャツを着たお団子頭のちびっ子がいる。

「おい、凜子！」

僕がそのお団子頭を呼び止めると、ちびっ子がちょっと顔を上げて、僕の顔を見つめる。だけど彼女が僕たちを振り向いた瞬間、彼女の着ている黒いTシャツに向かってハクトが水鉄砲を撃った。

「ハクちゃん、止めてよ」

凜子は嫌がり、ハクトから水鉄砲を取り上げようと、ハクトを追いかけて遠くに行ってしまった。

マリモが、思わず吹き出して、大きな声で笑う。

「実家帰ったら、こんなおもしろいこと、なかろうもん」

そう言うなり、マリモはプールの中に入り、ハクトを追いかける凜子の小さな身体を抱き上げた。そして、もう片方の手でハクトを捕まえ、水の中に放り投げる。

「てめえ、マリモ、なにしやがんでえ！」

ハクトは水浸しになって怒ったけど、マリモと凜子がそんなハクトを見てゲラゲラと笑った。

「セツヤ」

ふいに、マリモが、僕を振り返る。

「俺をBlauer Himmelに入れてくれて、ありがとうな」

ばっちり目と目を合わせて。あの、甘ったるい声で。マリモが、僕に感謝する。そんなマリモの顔がとてもカッコ良くて、僕は思わず頬を赤らめた。

「お.....おう」

「.....な、セツヤ。東京ドーム。行こうな」

「うん」

マリモの提案に、僕は大きく頷いた。



太陽が、沈む。

大きな大きな太陽が、暖かい光で僕たちを照らしながら、沈んでいく。

朝（あした）や明日（あした） 惑う花、惑う香



ひらり、ひとひら 舞い落ちる惑う花 ふわり、ふうわり ほのかに惑う香

夕暮れ時にふと思い浮かぶ君の笑顔 ちょっとさびしそうだったなあとか思いながら歩く  
言葉をかけないと 振り向いても貰えないのに 君と話せる日はもう そう多くないのに  
明日の朝 声をかけたときに ちょっと迷惑そうに「おはよう」って言ってくれるだろう  
そんな君の表情が見たくて ついつい.....

ひらり、ひとひら 舞い落ちる惑う花 ふわり、ふうわり ほのかに惑う香

## サヨナラアシタ

<http://p.booklog.jp/book/90519>

著者 : taco

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/taco0220/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90519>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90519>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ